「サマータイムメモリー」

東田航太朗

○昼　山道

息を切らしながらギターを担ぎ歩く健太

健太「はぁ、はぁ、ほんとにこんなところにデカい木なんてあるのかよ……。いくら作曲のためとはいえ、こんなに暑い中ギター担いで山を登るのはさすがにつらいな……。」

しばらく歩き開けた場所に出る

健太「やっと見つけた、デカい木、それにしてもほんとにこんな山奥にこんなでかい木があったなんてな、一人でゆっくりしながら作曲するにはちょうどいいな、道のりを考慮しなければだけど……。」

健太、木の方に近付こうとしたところで巡璃がいることに気づく

健太「先着かな、なんか気まずいしせっかくここまで来たのにまた引き返すって言うのも何か勿体ない気もするよな……。」

健太、巡璃と間が合い慌てながら巡璃に近付く

健太「あの、えと、その、こんな山奥にこんなにデカい木があったんですね！俺も友達に教えられて初めてここにきたんですけどなんかすごい落ち着きますね！ってなんでおれ勝手にこの子も初めてここに来たって決めつけてんだよ、あー、えっと、そうじゃなくて、はじめまして、ここで何してるんですか？」

巡璃「座ってる」

健太「あー、それはみて分かるって言うか、
座って何をしてるのかなって」
巡璃「何も、ただぼーっと時間が過ぎるのを
待ってたの、あなたは何をしに来たの？」
健太「俺は作曲をしに来たんですよ、友達に
落ち着けるところがないか聞いてみた
らここを教えてくれて、確かにこんだけ
大きい木の影の下だとちょっとは涼し
いし落ち着きますね」
巡璃「うん、落ち着く、だからいつも私もこ
の木の下でこうやって座ってる」
健太「そうなんですね、確かに、座ってるだ
けで涼しい風も吹いてきてすげー落ち
着く……」

巡璃、健太のギターを見る

健太「あ、これですか？これギターなんです
よ、俺友達と四人でバンド組んでて、ギ
ター弾いたり作曲したりするんですけ

ど、どうも最近いいアイデアが出なくて、
それでさっき言ったみたいに友達にこ
こ教えてもらって作曲をしに来たんで
すよ、あ、良かったら引いてみます？」

巡璃頷く　健太ギターを渡す

健太「ギターにはコードっていうのがあって、
いろんな音を合わせて綺麗な音を作るんだ
けど、そうだな、初心者なら……。ここの
一つ目の弦と四つ目の弦と五つ目の弦を押
さえながら一番下の弦以外を弾いてみて」

巡璃、Cコードを弾く

巡璃「わ、すごい……」

健太「だろ！他にはこんな音もあるんだけど
……。　こことここととここを抑えると」

巡璃、G7コードを弾く

巡璃「すごい、全然違う音」

健太「だろ？こんな風に押さえる場所によって全然違う音が出るんだよ、最後にちょっと難しいけどここととここととここを押さえると……」

巡璃 Fコード省略形を弾く

健太「すげー！上手いじゃん！それで、この音を順番に弾くと」

健太、巡璃からギターを返してもらいきらきら星を弾く

巡璃「すごい、一緒の音なのに全然違う音みたい」

健太「お、わかってるじゃん！でもこの曲はさっき教えたコードだけで弾けるんだよ、最初に教えたやつの次に三番目に教えたコード、また最初のに戻って、二番目と最初

のを繰り返す、って口で言うだけじゃ難しいか……。教えてあげるよ」

健太、再度巡璃にギターを渡しきらきら星を教える

○夕方にフェード

健太、辺りを見回す

健太「そろそろ暗くなってきたな、今日はここら辺で終わっとこうか、にしても凄いな、俺が1週間かけても弾けなかったところをたったこれだけの時間でマスターするなんて、でも完奏まではもうちょっと時間がかかりそうだな」

健太、ギターを片付け帰る準備をし始める

健太「よし、帰るか、あんたもいっしょに降りるだろ？」

巡璃「……ううん、私は……あとでお父さん

とお母さんが来てくれるから」

健太「そっか、じゃあ今日はここでお別れだな」

健太歩き始める

巡璃「あの！」

健太振り返る

健太「ん？どうした？」

巡璃「また、来てくれる？」

健太「もちろん！次に会ったときにはきらきら星弾けるようになろうな！」

巡璃「それと……名前」

健太「あ！名前！ギターに夢中になって名乗るの忘れてた……。それに気づいたらため口になってたし……。俺は健太、これからもよろしくな！」

巡璃「巡璃」

健太「ん？」
巡璃「私は、巡璃……。これからもよろしく」
健太「おう！　あ、そうだ、次来るときは俺のバンドメンバーもつれてきていいかな？みんないいやつだし、それに他にもいろんな楽器のこと教えてくれると思うしさ」
巡璃「うん、いいよ、私ももっといろんな音、聴いてみたい」
健太「わかった！また次に来るときはみんなと一緒に来るよ、じゃあ、また今度！」

健太捌けると暗転

○昼　チャイムの音
健太、誠、優太、遥香が歩いてくる
誠「おい、いつになったら曲を完成させるんだ？　なんだかんだでもう2カ月は待ったぞ」
健太「悪い、もうちょっとだけ、もうちょっとだけ待ってくれないか？」

誠「一体何回そのちょっと待ってくれをきいてやらなくちゃいけないんだ、俺たちは」
優太「まあまあ、そこまで言わなくても」
健太「ありがとう優太、お前はそのままずっと俺の味方でいてくれー」
優太「いやあ、それはできないかなぁ」
健太「なんで！？」
優太「さすがに待たせすぎだよ、誠が怒る理由だって分かる、せめてどんなテーマで曲を作るのか言ってくれないとアレンジを加える遥香だって困るんじゃないかな」

優太と健太、遥香の方を見る

遥香「いや、私は別に大丈夫だよ、ケンちゃんの納得のいく曲を作ってくれれば」
健太「ありがとう、やっぱり持つべきは鬼でも優柔不断でもなく遥香だ！」
誠「そうやって甘やかすからこいつはすぐに調子に乗るんだ、遥香ももっと厳しくこい

つに言ってやらないと一生こいつはこのまま
まだぞ」
優太「そうだよ、遥香もちゃんと健太に言っ
てやらないと」
健太「だからお前はさっきからどっちの味方
なんだよ！この優柔不断！」
優太「な、もう健太の味方はしない、健太は
ずっと誠に起こられていればいいんだ！」
遥香「まあまあ、二人とも落ち着いて、でも
そうだね、確かにそろそろ曲のテーマぐら
いは決めて欲しいかな……」
健太「そう！テーマ！決まったんだよ、曲の
テーマ！」
優太「本当！？やっぱやればできるんじゃん」
健太「だからお前はさっきからどっちの味方
なんだよ！」
誠「それで、そのテーマっていうのはなんな
んだ？」
健太「夏！」
誠「は？」

優太「え」
遥香「えーと」

三人で顔を見合わせて

誠・優太・遥香「それだけ？」
健太「それだけってなんだよ！いいじゃん！夏！」
優太「いや、だから、ほら、もっと具体的な、スイカとか花火とか、そういうのはないの？」
健太「そうだな、強いて言うなら夏に吹くちょっと涼しい風、とか？」
誠「いいな」
優太「いいじゃん」
遥香「うん、いいとおもう！」
健太「だからお前らさっきから手の平くるくる過ぎるんだよ！もっと俺を優しく、丁重に扱え！」
誠「無理だな」

優太「無理だね」
遥香「それは、ちょっと、うん、無理かも」
健太「おい！　これでも一応バンドリーダーなんだぞ、俺」
誠「最初は俺がやるって言ってただろ、なのにお前が駄々こねてうるさいから仕方なくバンドリーダーにしてやったんだろ」
健太「それは、そうだ、すみません」
誠「それにしてもどうして急にそんなテーマが降って湧いて出てきたんだ？」
健太「あ！そう、それだよ！　この前行ってきたんだよ、お前の言ってた裏山の奥にあるでかい木のとこに、そしたらさ、巡璃っていう女の子がいて、一緒にギターを弾いてさ、そん時に吹いてた風が気持ちよかったなーって」
遥香「へー！なんかすごいいいね！私も今度そのでかい木？のところ行ってみようかな」
健太「そう！それでさ、その巡璃って子にギター教えるとすごい気に入ってくれたみた

いでさ、またギター教えてくれって言うからもちろん！って一つ返事で約束したんだけどさ、またお前らも一緒に巡璃にベースとかドラムとか教えてやってくれないか？」

誠「なんで俺たちが……」

健太「あそこを教えてくれたのはお前なんだからいいだろ？」

誠「いや、それとこれとは全く関係がないだろ」

優太途中で遮って

優太「いいね！僕もその巡璃って子に会ってみたいし、それに青春って感じがしてすごくいい！」

健太「夏だけどな」

誠「おい、そんな勝手に」

遥香「いいじゃん！私もその巡璃って子に会ってみたい！それにケンちゃん一人で行かせて全く作曲が進まない方が問題なんじゃ

ない？」

誠「それは……。　ああ、もう！わかった、行くよ、行けばいいんだろ！」

健太「やったぜ！じゃあ今週の日曜の１３時に裏山の入り口で集合な！」

誠「おい、勝手に日程まで」

健太「なんか予定あるのか？あるなら別の日でもいいけど」

誠「……ない」

健太「じゃあ日曜で決定だな！」

誠「わかったよ」

優太「それにしても、夏っていってももう九月だよ？ほんと、今年の夏はどうしちゃったんだろ」

遥香「そうだよね、なんならこれからまだ暑くなっていくって言われてるし」

優太「そうなの！？ほんと、全く夏が終わる気がしないよ……」

健太「このまま今年はずっと夏が続いたりしてな」

優太「そんなの勘弁だよー」

誠、腕時計を見る

誠「悪い、そろそろバイトの時間だ」

優太「ほんとだ、僕もこの後親に頼まれてる用事があるから先に帰るね」

遥香「おつかれさまー」

誠「この夏がいつ終わるか分からないんだから早いところ書き終わらせろよ」

健太「言われなくても分かってるよ、じゃあな」

誠「ああ、じゃあな」

優太「じゃあねー」

誠・優太捌ける

遥香「あの、さ、もし作曲が行き詰ってるなら、私、手伝おうか？ほら、私もアレンジのイメージとか湧くかもしれないし！」

健太「ごめん！その、気持ちは嬉しいんだけど、作曲はなんか一人でしてる方が落ち着くっていうか、なんというか」

遥香「……そうだよね！ごめん、ケンちゃんがいつも一人で作曲してるのは知ってたのに」

健太「ううん、こっちこそごめん！気持ちはすげーうれしいしまた行き詰ったときとかは相談させてもらうから！」

遥香「うん、わかった」

健太「それじゃ！また明日！」

健太捌ける

遥香「うん、また明日……」

○暗転

○昼　山道入り口

健太・誠・優太・遥香

健太「よし、みんな集まったな、んじゃ行くか」
誠「おい」
健太「ん？どうした？」
誠「お前正気か？こんな重たいベース背負って山に登れって」
健太「あたり前だろ、巡璃にベースも教えてやるんだから」
誠「はあ、わかった、ただし、ベースとギターはみんなで交代しながら持つ、いいな？」
健太「ああ、そうだな、この前上った時もギター担ぎながら行ったけどほんんとあり得ないぐらいしんどかったからな」
誠「だろうな、よくやったよほんとに」
優太「え、その交代ってのには僕と遥香も含まれてるの？」
誠「当たり前だろ」
優太「そんなぁー」
遥香「まあいいじゃん、二人だけに持たせた

らそのでかい木のところまで辿りつけない
可能性だってあるんだし、ここは手伝って
あげようよ」
優太「まあ、それはそうだけど……ちゃんと
公平な分配で分けてよー」
健太「分かってるよ」
誠「よし、それじゃあそろそろ行くか」

健太・誠・優太・遥香　捌ける

○木の近く

健太・誠・優太・遥香息を切らせなが
ら入ってくる

健太「よし！ついた！」
誠「久しぶりに来たが、やっぱり落ち着くな」
遥香「わー！すごい！ほんとにこんなところ
があったんだ！」
優太「やっとついたー、やっぱ僕の持つ回数
多かったくない！？」

健太「そんなことねーよ、みんな十分づつで
交代しながらもってただろ？」
優太「そうだけど、じゃんけんで負けた人が
持つってルールは不公平でしょ」
遥香「ちょっとでも持つ回数を減らす可能性
を出したいって言って優太から提案してき
たんでしょ？自業自得だよ」
優太「それはそうだけど……」

健太、辺りを見回す

健太「お、いたいた！おーい巡璃ー！」

健太巡璃に駆け寄る

巡璃「本当に来てくれたんだ」
健太「当たり前だろ、今度はみんなと一緒に
来るって約束しただろ？」
巡璃「うん、ありがとう」
健太「あ、そうだみんなのことちゃんと紹介
しないとだな、おーい！」

健太、みんなを呼びだす

健太「この子がこの前言ってた巡璃」

巡璃「こんにちは、巡璃です、今日はわざわざ来てくれてありがとうございます、よろしくお願いします」

優太「よろしくー」

誠「よろしく」

遥香「巡璃ちゃんよろしく！これまでバンドメンバーで女性は私一人だったから女の子の友だちができてとってうれしい！あとでいろんな楽器のこと教えてあげるね！」

巡璃「うん、ありがとう」

健太「じゃあ、こっちの自己紹介もしないとだよな、まず、こっちが誠」

誠「よろしく、こいつとバンドを組んでる、パートはベース、実際に見せた方が早いか」

誠ベースを下ろして取り出す

誠「ベースはギターと違ってこの太い弦を鳴らす楽器で、弦の数は基本四本、バンド全体のリズムを揃えるパートだ」

巡璃、誠の指を見る

誠「ん？ああ、この指か、さっき言ったみたいにベースは弦が太くて硬いんだ、だからずっと弾いてるとこんな風に指の腹が傷つくし硬くなっていくんだ」

巡璃「痛そう……」

誠「慣れればそんなことはないよ、まあ、確かに最初の方は痛かったけどな、あんた、あー、すまない、巡璃も痛いのが嫌だったり面白くなさそうなら無理せず弾かなくてもいいからな」

巡璃「ううん、楽しそう、弾いてみたい」

誠、面食らったような顔をする

誠「そうか、じゃああとでいっぱい教えてあげるよ」

巡璃「うん、ありがとう」

健太「よし、じゃあ、次は優太」

優太「こんにちは、キーボードをやってます、今回は実物がないし教えてあげることはできないんだけど、キーボードはいろんな音を出すことができる楽器で、演奏にアクセントっていうかスパイスっていうか、華を持たせる？みたいな役割があります。あんまり目立たないんだけどいろんな音を使って曲のイメージを表現するのはとっても楽しいんだ、また機会があったら巡璃ちゃんにも教えるね！」

巡璃「うん、楽しそう、また教えてもらうの楽しみ」

優太「そうでしょ！たのしそうでしょ！巡璃ちゃんわかってるじゃん！もっというとね、キーボードの魅力はシンセサイザって言う

のにあって、これがまた説明したら長くなっちゃうんだけど」

健太「はい、そこまで！長くなるなら説明はしないでくださーい、はい、次は遥香」

優太「え、ちょっとまってよー、まだ半分もキーボードの魅力を説明できてないのにー」

遥香「優太はキーボードの話をし出すと長くなっちゃうから、また今度、ね？」

優太「今度っていつなんだよー！」

健太と誠が優太を押さえる

遥香「ごめんね、優太がうるさくて、さっきもケンちゃんが言ってたけど私は遥香、よろしくね、私はドラムっていう楽器をやっていて、優太と同じで実物は大きくて持ってこれてないから今日は教えてあげることができないんだけど、基本的には五つの太鼓？みたいなのと四つのシンバルを叩いてリズムを整えたりするのがドラムの役割で

す、他の楽器とは違って手足を絶え間なく動かして演奏していて、今楽器を弾いてるなーっていうのが実感できるとっても楽しい楽器になってます！どうかな、ちゃんと伝わったかな？」

巡璃「すごい楽しそう、ドラムもまた教えてほしい」

遥香「もちろん！また今度絶対に教えてあげるね！」

巡璃「うん、ありがとう」

健太、手を叩く

健太「よし！じゃあみんなの自己紹介も終わったことだしいっぱい楽器弾こうぜ！」

○夕方

誠が巡璃にベースを教えている

誠「そう、それでこうやって指を上の方にス

ライドさせると音が繋がって聞こえるようになる」

巡璃「こう？」

誠「そう、そんな感じ、これがグリッサンドっていうテクニック、それで、これがハンマリング、次の音につなげるっていう同じ役割でも全然聞こえ方が違うだろ？」

巡璃「すごい、全然聞こえ方が違う、それもおしえて」

誠「ああ、ハンマリングは一つの音を弾いた直後に同じ弦の違う音を押さえるんだ、基本的には拍の短い時に使うテクニックだな」

巡璃「やってみる」

巡璃、ハンマリングを実践する

巡璃「こう？」

誠「いや、もう少し早くするのと二回目に弾く音はもう少し気持ち強めに弾く方が綺麗な音が出る」

巡璃と誠を見ながら健太・優太・遥香
が話している
優太「すごいね、巡璃ちゃん、教えたことど
んどんできていってる、健太とは全然違う」
健太「おい、最後のは余計だろ」
遥香「でもケンちゃん最初の頃は一つコード
を覚えると一つコードを忘れるの繰り返し
だったよね」
健太「うるせー、いまはもう完璧にどのコー
ドも弾けるんだからいいだろ」
優太「今でもFコードはたまにへなちょこな
音になることあるけどね」
健太「そんなことねーよ、Fコードだって完
璧だってんだ」

健太、持っているギターでFコードを
弾くが変な音が鳴る

健太「あ、今のはちが」

遥香「ほらやっぱり」
優太「やっぱり健太は期待を裏切らないなー」
健太「うるせー！ほら、もう辺りも暗くなってきたし帰るぞ」
遥香「あ、話逸らした」
健太「だからうるせーよ！おーい、二人とも、そろそろ帰るぞー」

誠と巡璃、健太の声に気づいて片付けを始める

巡璃「みんなありがとう、今日はとっても楽しかった、えっと、その、また遊びにきてね」
健太「もちろん！」
優太「うん、また会いに来るよ、その時は死ぬ気でキーボードもって来るから！一緒に弾こうね！」
遥香「私もドラムセットは無理かもしれないけどドラムパッドぐらいなら持ってこれる

と思うからまた次来たときはドラムのことも
いっぱい教えてあげるね！」
誠「俺も、今日は楽しかったよ。まだ教えれていないテクニックとかコツとかがあるから今度来た時はそれも教えてあげないとだな」
健太「次来た時にはきらきら星完璧に弾けるようにしような！」
巡璃「うん、みんなありがとう、本当に楽しかった」
健太「今日もお父さんとお母さん待ってるのか？」
巡璃「……うん、夜までには来ると思うから、みんなは先に帰っててて」
遥香「そっか、巡璃ちゃんも気を付けてね、また絶対に遊びに来るからね！」
巡璃「うん、約束」
遥香「もちろん！約束！」

巡璃と遥香、指切りを立てる

健太「じゃあ、巡璃の言う通り俺たちは先に
降りるか」
誠「そうだな」
優太「それじゃあ、またねー！」

健太・誠・優太・遥香手を振りながら
山を下りる

○昼

ＴＶ(ラジオでも可)から気温が少しづ
つ下がってきているニュースの音が聞
こえている

健太、楽譜を片手に頭を抱えている

健太「んー、あともう少しで完成なんだけど
なー……」

健太、動き回ったりギターを弾いたり

して悩んでいる

健太「あー、クソ！だめだ、完全に行き詰った……　そういや、巡璃元気にしてるかな……　会いにいくか」

健太、ギターを抱えて準備を始める

（ここでＴＶor ラジオの電源を切る）

健太「そろそろ秋も近付いてきたし、本格的にこの曲完成させないとだよな……」

健太、支度を済ませて出る

○山道入り口

健太「それにしても気温が下がってきているとはいえ、まだ、結構暑いな、こりゃまた結構厳しい道のりだな」

健太、山道を歩き始める

○でかい木の広場

息を切らせながら健太が歩いてくる

健太「はあ、はあ、くっそ、相変わらずキツイな……誠たちもつれてきた方が楽だったかもな……」

健太、木の方を見るが巡璃が居ない

健太「あれ、巡璃のやついないのかな、おーい、巡璃―、またギターの練習一緒にしようぜー」

蝉の音だけが響いている

健太「やっぱりいないのかな、仕方がないしとりあえず今日はここで一人で曲作るか」

○夕方

健太「結局今日は巡璃来なかったな、なんかここに巡璃がいるのが当たり前な気がしてたから不思議と変な気持ちになるな、それに結局今日もほとんど作業も続かなかったし……　今日は、帰るか」

健太、荷物をまとめて山を下りる

○昼　山道の入り口

健太「二日連続だけど、まあ作業が全く進まないよりはましだよな、それにまた巡璃にきらきら星の続きを教えてあげるって約束してるんだし」

健太、山道を登っていく

○でかい木の広場

息を切らせながら健太が歩いてくる

健太「はあ、はあ、だから相変わらずキツイなこの山」

健太、辺りを見回す

健太「今日もいない、か」

健太、木の下に座って作業を始める

○夕方

健太「はあ、今日も巡璃はこないし作業の進捗もゼロか……　ほんとどこいったんだろうな、巡璃のやつ……」

健太、きらきら星を弾き、弾き終あわると帰る準備を始める

健太「早く練習しないと忘れっちまうだろうが……。そうだよな、せっかく覚えたんだ、

早く続きを教えてやらないと」

健太、山を下りる。

○昼　山の入り口

健太「よし、今日こそは巡璃にきらきら星の続きを教えてやらないとな！」

健太、山を登る

○でかい木の広場

健太「気温が下がってきてるからか分からないけど今回は比較的楽に感じたな」

健太、辺りを見回す

健太「今日もいない、か」

健太、木の下で作業を始める

○夕方

鈴虫の鳴き声

健太がきらきら星を弾き始めたところに巡璃が近付いてくる

巡璃「健太」

健太「巡璃！巡璃、やっと会えた、心配したんだぞ、ここ最近ずっと通ってたのに全然会えなくてさ、きらきら星だってまだ完璧じゃないのに、忘れる前にまた教えてあげないとって、それにほら、見てくれよ！もうすぐで曲が完成しそうなんだ、だからそれを聞いてほしくてさ！巡璃に会えたらまたいいアイデアが浮かぶかもって」

巡璃「あのね」

健太「どうしたんだよ、そんな暗い顔して、なんか、あったのか？」

巡璃「もうすぐで、秋だね」

健太「え、ああ、そうだな、過ごしやすくな

ったよな！気温も下がってミンミンうるさかった蝉も鳴き止んできて」

巡璃「うん、そうだね」

健太「おい、どうしたんだよ、なんか言いたいことがあるならさ、はっきり言ってくんないと分かんねーよ、いや、でも別に言いたくないことなら無理しないでいいけどさ」

巡璃「ううん……。あのね、多分、健太に会えるのは今日で最後だと思う」

健太「え、なんでだよ、なんで、なんだよ」

巡璃「ごめんね」

健太「だから、ちゃんと言ってくれないと分からねーよ！」

巡璃「ごめんね」

健太「俺と、約束したじゃねーか、きらきら星完璧に弾けるようになろうって……。誠と、約束してたじゃねーか、もっとベースのテクニックとか、コツとか、教わるって……。優太と、約束、してたじゃねーか、次に会うときはキーボードここに死ぬ気で

もって来てさ、弾かせてあげるって……。
遥香と、約束してたじゃねーか、ドラムセットは無理でも、ドラムパッドでいろいろドラムのこと教えてもらうって……。　俺との約束も、アイツらとの約束も、全部、嘘だったのかよ、なあ、嘘だったのかよ！
……。　ちゃんと、言ってくれよ」
巡璃「あのね、私、幽霊なの」
健太「え？」
巡璃「夏の魔物？夏の亡霊？っていうのかな、私は、夏にしかいられない、秋が訪れれば私は消える。みんなの記憶からも、記録からも……。だから、涼しくなってきて、蝉も鳴き止んじゃって、鱗雲が見えるようになったらね、私は、消えちゃうの」
健太「嘘だ、嘘だ！嘘、だよな……」
巡璃「黙っててごめん、本当はね、もっと早く消えるはずだったの、誰にも気づかれずにこの木の下で、ただぼーっと時間が過ぎるのを待ってるうちに、私は消えるはずだ

った。でもね、健太がここに来て、私のことを見つけて、誠や優太や遥香と一緒に楽しい、忘れられないような時間を過ごして、みんなの記憶に残ることで本当にちょっとだけだけど消えずにとっても楽しい思い出を残すことができた。神様が許してくれたのかな、……この本当はなかったはずの短い夏のあいだ、私はとっても楽しかったよ、約束を守れなかったのは本当に残念だけど、叶えられるなら、もう一度、みんなと楽しく楽器を弾きたかったな」

健太「おい、やめろよ、そんな、最後みたいな言い方……」

巡璃「それと、最後に、本当は、遥香みたいに健太のこと、こうやって呼びたかったんだ、バイバイ、ケンちゃん」

○暗転

健太「巡璃、巡璃！おい！俺はまだ、なんも言えてねぇよ……」

○昼

健太・誠・優太・遥香が集まっている

誠「おい、なんだよ、急に呼び出して」

優太「なにかあったの？」

遥香「あ、もしかしてやっと曲が完成したとか？」

健太、しばらく黙っている

健太「巡璃に関して、話したい事があって、今日はみんなに集まって貰った」

優太「巡璃ちゃんに関して？あ、次に会いに行く日が決まったとか？」

遥香「そういえば、次いつ行くか決めてなかったもんね」

健太「……違うんだ」

遥香「なにが違うの？」

健太「……巡璃とは、もう会えない、かもしれない……」

優太「え、それってどういうこと？巡璃ちゃんが何かの病気になっちゃったとかそういうこと？」

健太「違うんだ……みんな、信じてくれないかもしれないけど、巡璃は、幽霊だったんだよ」

遥香「どういう、こと？いや、だって仮に巡璃ちゃんが幽霊だったとしても会えないってことにはならないじゃん」

健太「夏の亡霊……って巡璃は言ってた、夏の間にだけ現れる、自分はそんな幽霊なんだって」

優太「そんなのを信じろって言うの？健太は」

健太「信じられるようなことじゃないっていうのは分かってる！俺だっていまだにちゃんと一から百まで信じられてない、でも！巡璃はこう言ってたんだよ。誠や優太や遥香と一緒に楽しい、忘れられないような時間を過ごして、みんなの記憶に残ることで少しだけど、消えずに残ることができたっ

て」

誠・優太・遥香「……」

健太「だから、この夏が終わる前に、なんとしても、曲を完成させる。それで、俺たちと、巡璃との思い出を忘れられないものとして形に残すことで巡璃が居なくならないようにする。それで、これからもずっと、巡璃と一緒に楽しい思い出を、もっと増やしていきたいんだ！」

優太・遥香「……」

誠「なんで」

健太「え？」

誠「なんで、俺がそんなことをしなくちゃいけないんだよ」

優太「おい、誠、いまお前なんていったんだよ……」

誠「だから、なんで俺がそんなことしなくちゃいけないのかって言ったんだよ！」

優太「お前！」

優太、誠に殴り掛かる

遥香、それを間に入って止める

誠「巡璃は、夏が終われば自分は消えるって言ったんだろ？それと一緒に記憶に残っていたから残り続けることができたって、それはつまり、裏を返せば巡璃が記憶に残っている限り、巡璃が消えない限りずっと夏が終わらないってことだろ！そんな、世界の秩序を崩すようなことに、なんで俺が加担しなくちゃいけないんだって言ってんだよ！」

優太「お前！お前が言ってることは人じゃねぇぞ！」

誠「それはどっちだ、世界の秩序を崩そうとしているお前らの方だろ！違うか！」

優太、遥香を振りほどいて誠を殴る

誠「気は済んだか？人一人と世界、どっちを

取るかなんて明白だろ」

優太「この、人でなしが！」

優太、誠の胸ぐらをつかむ

優太「もう、お前とはやっていけない」

誠「そうかよ」

優太、誠を突き放して捌ける

遥香「ちょっと、優太！」

遥香、優太を追いかける

誠の横で止まる

遥香「ごめん、私も誠の言うことは、理解できない……」

遥香、捌ける

健太「誠、お前……」

誠「なんだよ、お前も恨みつらみを言ってくれるのか？」

健太「いや、お前の言いたいことはよくわかるよ、俺も、今日この瞬間までずっと悩んでた。でも、人一人が世界の価値を超えることだってあるんだ。お前の意見は尊重する。だから、この先は俺たちだけでやるよ。無理言ってすまなかった」

健太捌ける

誠、その場で倒れ伏せる

誠「ああ、くそ、そんなこと言ったって、分かるわけないだろ、だって、俺は……、その巡璃って子のことを知らないんだから……」

○暗転

○昼

健太と遥香が立っている

遥香「どうしたの？急に呼び出して」

健太「できたんだよ、曲が、やっと完成したんだ！」

遥香「ほんと！？やっと完成したんだね！ケンちゃんならきっと完成させてくれるって思ってたよ！あとは私がアレンジを加えるだけだよね」

健太「ああ、頼む、みんなの記憶に残るような、とびっきりすげー曲に仕上げてくれ！」

遥香「もちろん！あとは任せて！」

健太、遥香に楽譜渡す

遥香、楽譜に目を通す

遥香「……ごめん、ケンちゃん、この曲は私にはアレンジもできないし、弾くこともできない」

健太「え、なんで、どういうことなんだよ」
遥香「ケンちゃん、本気で言ってるの？本当に、これまで全く、私の気持ちに気づいてなかったの？」
健太「気持ちって、え、どういう……」
遥香「私は！ずっとケンちゃんの隣にいた！ずっとケンちゃんのことを想い続けてきた、分かってたよ、ケンちゃんにその気がなかったことなんて……。いつもケンちゃんが悩んでいるときや困っているときには力になってあげたくて何度も何度も声をかけて、ちょっとでも寄り添ってあげようとした……。でも、ケンちゃんはその手を一回も掴んでくれなかった……」
健太「違う、それは、遥香に負担をかけたくなくて」
遥香「そんなの、分かんないよ！ちゃんと、言ってくれなきゃわかんないよ……。これだけ思ってきた人に、急に私以外の人へ向けた思いを渡されて、そんなの受け入れら

れるわけがないよ……。私以外の人との思い出を、こんなに楽しそうに書き綴ったものを見せられて、受け入れられる、わけが、ないよ……」

健太「違う！それは、俺と誠と優太と遥香と、巡璃との思い出だ！」

遥香、ゆっくりと健太の方に顔を向ける

遥香「巡璃って、だれ？」

○暗転

○昼

健太と優太が二人で立っている

優太「急に呼び出してどうしたの？」

健太、優太に飛びつく

健太「優太……」

優太「どうしたんだよ、怖いなー」

健太「巡璃って子のこと覚えてるか？」

優太「え、巡璃？知らないなー、健太の従妹か誰か？」

健太「そうか、そう、だよな、もう誰も、巡璃のことは、覚えてないんだな……」

健太、気力なく捌けていく

優太「おい！健太！どうしたんだよー！」

優太、健太が捌けきるまで見る

優太「心配だな……」

優太捌ける

健太、でかい木の広場に出てくる

健太「だれも、巡璃のことを覚えていない。巡璃との思い出も、約束も、何もかも……。なんで、なんで……」

健太、気力なく歩き出す

健太「巡璃、巡璃！巡璃ー！、おーい、返事してくれよ……。巡璃ー！」

誠、でかい木の広場に入ってくる

誠「巡璃ー！おーい！」

健太「え、この声……誠？」

誠「おい、何へたってんだよ、巡璃を探すんだろ？」

健太「誠、なんでお前ここに……」

誠「あの後何度も何度も忘れようとしたんだ、巡璃って子の名前を……。でも、忘れられなかった……。全く記憶にないのに、お前が言うことが馬鹿みたいなことだってわか

ってるのに、その名前がずっと頭から離れなかった……。多分、俺にとっても、大事な人だったんだろ？その巡璃って子は」

健太「誠、お前、かっこいいじゃん」

誠「うるさい、早く探すぞ」

優太、でかい木の広場に入ってくる

優太「巡璃ー！おーい！早く出てきてよー！」

健太「優太、お前も、何で……」

優太「健太が言ってた巡璃って子の名前になんかすごい引っかかた感じがしてさ、健太は心配なぐらいおぼつかない足取りでどっか行っちゃうし、だから、きっとその巡璃って子は僕にとっても健太にとっても大事な人なんだろうなって」

健太「お前は、相変わらずよくわかんねぇな」

優太「おい！それどういう意味だよ！」

健太と誠と優太で笑っている

遥香、でかい木の広場に入ってくる

遥香「なにみんなしておかしなことで笑ってるのよ」

健太「遥香、その、ごめん」

遥香「今はもういい、巡璃って子を探すんでしょ、早くしないと日が暮れちゃうよ」

遥香捌けていく

優太「途中で会ったんだ、一緒に探そうって言っても全然聞かなくてさ、でもここに来たってことはやっぱり遥香も巡璃って子が大事な人だって気づいてきたんじゃないかな」

健太「みんな……。ありがとう、それで、絶対に見つけよう！」

誠「そうだな」

優太「もちろん！このままじゃ気分よく寝れないからね」

健太・誠・優太・遥香、それぞれ巡璃の名前を呼びながら探しまわる

健太、しばらくした後にでかい木の広場に入ってくる

健太「おーい！巡璃！おーい！返事してくれよ！」

巡璃、でかい木の広場に入ってくる

巡璃「どうしたの？」

健太「巡璃！巡璃、やっと、やっと見つけた……。消えてなかった、まだ、消えてなかったんだな……よかった、本当に良かった。すぐみんなを呼ぶから、ほら、みんなとの約束、叶えよう、ギターもベースもキーボードもドラムセットも全部持ってくるから、約束、叶えよう！」

巡璃「……ごめん、私は、最後の挨拶と、お

礼をしに来たの、本当にもうすぐで私は消えちゃう、だから、最後に、みんなにありがとう、元気でねって伝えたくて」

健太「やめてくれ！もうそんな言葉を言うのはこの前ので最後にしてくれよ、頼むよ、嘘でもいいから、ずっとここにいるって、そう言ってくれよ！」

巡璃「……ありがとう、元気でね、バイバイ」

巡璃捌けていく

健太「あ、ああ、行かないでくれ、め、クソ、なんで……なんで、名前が、名前が……」

○暗転

○昼

健太と誠が二人で話している

誠「遥香とはちゃんと仲直りしたのか？」

健太「ああ、やっと前みたいに話せるようになったよ」

誠「そりゃあそうだよな、あんな曲出されたらそりゃああなるよ」

健太「そう、だよな……遥香の気持ちには気づいてたんだ……。でも、何故かあの曲だけはなにがなんでも完成させないと思ってさ」

誠「それはあの曲を完成させるときにもう何回も聞いたよ。実は俺あの曲好きなんだよ」

健太「なんであんな曲……」

誠「なんかさ、笑っちゃうんだよ、あの曲の歌詞の最後を聞いたら」

健太「あの曲の最後？」

誠「ああ、ほら、『また君に巡り会えた』らってとこ……。自分でもなんでなのか分からないけど、笑ちゃうんだよ、おかしいよな」

健太、固まっている

誠「おい、健太、どうした？」

健太「巡り、会えたら……。巡り……巡璃！」

誠「おい、急にどうしたんだよ」

健太「そうだよ、なんで忘れてたんだよ」

健太、走って捌ける

それを追いかけるようにして誠も捌ける

○でかい木の広場

木の下で巡璃が後ろ向きで立っている

健太が息を切らせながら入ってくる

健太「巡璃！」

巡璃振り返る

巡璃「また、会えたね、ケンちゃん！」

End